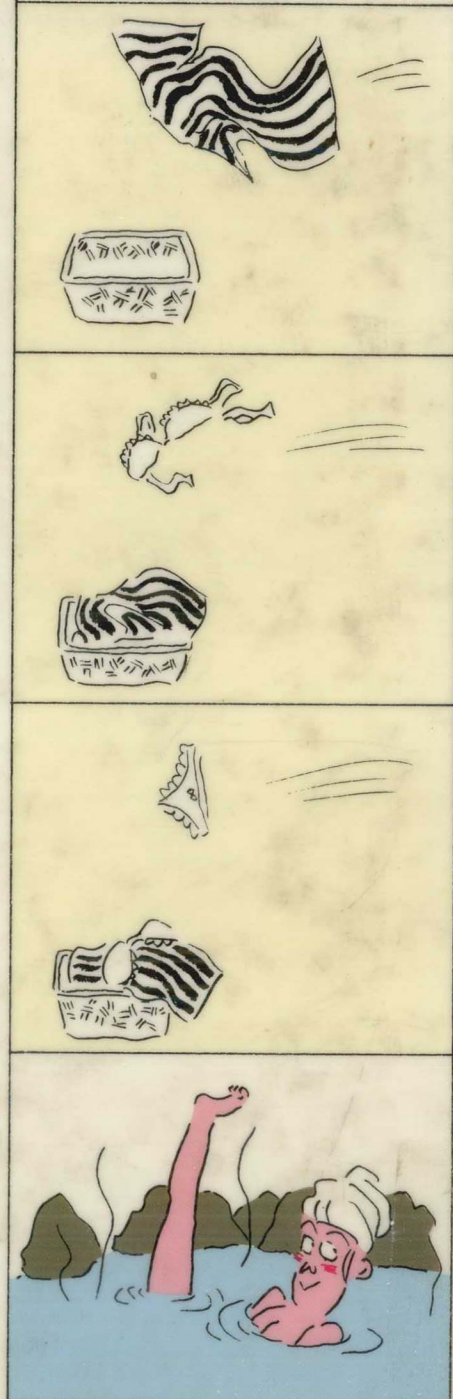


秘湯中の

清水義範

大陸書房



秘湯中の秘湯
清水義範



大陸書房

秘湯中の秘湯

著者

清水義範

発行者

塚田友宏

発行所

株式会社大陸書房

清水義範
昭和22年10月28日、名古屋市に生まれる。
愛知教育大学卒。昭和56年、「昭和御前試合」
（CBSソニー出版刊）で文壇にデビュー。
著書に「グロージング・ダウン」（光風社出版
刊）、「深夜の弁明」（実業之日本社刊）、「蕎麦
ときしめん」（講談社刊）、「金鱗の夢」（集英
社刊）、「アキレスと亀」（廣済堂出版刊）など
がある。
『国語入試問題必勝法』（講談社刊）により、
昭和63年吉川英治文学新人賞受賞。

印刷・製本

中央精版印刷（株）

〒113 東京都文京区本郷2-13-9
☎ 03(814)7441 [営業]
☎ 03(814)5693 [編集]
郵便振替 東京1156612

乱丁・落丁のものは小社またはお買い求めの書店にてお取替え致します。
定価はカバーに表示してあります。

©YOSHINORI SHIMIZU 1990 Printed in Japan

ISBN4-8033-2703-3 ②

秘湯中の秘湯

目 次

秘湯中の秘湯 7

非常識テスト 39

痩せる方法 65

故事付成語 87

取扱説明書 101

アンケート結果分析 125

結婚したい女性・百三の条件

恐怖のニッポン食べ物ガイド 175 151

周到な手紙 183

只今会議中 205

ジャポン大衆シャンソン史 231

あとがき 268

カバー・デザイン
カバ―イラスト

安彦勝博
井上正治

秘湯中の秘湯

秘湯とは何か。その定義はむつかしい。

人にあまり知られてなくて、宿や風呂の立地や形式が珍しく、湯の成分が異色である、というようなものを秘湯と呼ぶのだろうが、とにかく秘湯の第一条件は、人外境にあることである。

ところが、テレビの温泉ガイドなどで秘湯を紹介するから、一種の秘湯ブームというものが起こってしまい、多くの人が押しかけることになる。そうなればもう、そこは秘湯ではない。我も我もと人が集まる秘湯など、言葉の上でも筋が通らないわけだ。

また、かつて秘湯であったところが、自ら秘湯たることをやめるケースも沢山ある。つまり客を呼ぶために、宿を近代的なものに改築したり、送迎バスを走らせたり、モノレールを設置したりするのだ。モノレールで行ける秘湯というようなものはない。

そういうわけで、本当に秘湯だと呼べる温泉は非常に少なくなった。そこで、ここでは今もなお、秘湯と称して間違いないもの、そういう秘湯中の秘湯を紹介してみた。日本中の温泉を歩きまわった私が折り紙をつけるのだから、この情報は本物である。

ただし、これを読んだ人は、ここに紹介されている温泉へは絶対に行かないでもいい。あなたが行けば、結局そういうことが積み重なって、そこが秘湯ではなくなってしまうからである。

行っではいけませんよ。

骨壺温泉ほねつぼ
(北海道)

土多畑川どたばたの支流、葉栗谷くすぐりから川原に沿って三時間登ったところにある、ほとんど誰も行かない温泉である。川底に高温の湯が湧き出しているので、その地点から少し下流の滝のところではちようど人が入るのによい温度の温泉となっているのだ。つまり、その滝そのものが温泉であると思えばよい。打たせ湯をするのにまことに都合がよいわけである。

この温泉に入るためには、深い滝壺のところに立ち泳ぎして入ることになる。だから水泳のできない人にはあまり向かない温泉である。

景色はよい。新緑も紅葉も、それを見物するというよりは、その中にいる、という感じである。何もない山中の谷川につかっているのだから当然であろう。

下流のほうを見ると、離れたところにモコシモリ山を見ることができ、晴れた日にはその山頂のテレビ塔も見える。

もちろん宿などは一軒もないが、食べる物はある。というのは、滝壺のところではちょうどよい温度だが、その少し上流の、湯の湧き出し口では温度が九十五度もあるので、たまたまそこへ泳ぎかかった川魚の、やまめ、いわな、などが煮えてしまう。そういう煮魚が滝から落ちてくるので、それを拾って、塩かしようゆでもかけて食べればよい。川中で食べる煮魚の味はまことに格別である。

そういう思わぬ事故で死んだ魚の骨が、滝壺に積もっているので、ここを骨壺温泉というのである。

交通

釧網本線通過駅からバス40分で薬栗。そこから徒歩3時間。ただし、日が暮れると明かりは何もなく、遭難者扱いになるので注意。

泉質

アルカリ性食塩泉。95度。

効能

のびのびした気分。

宿　なし。

風呂湯温泉（秋田県）

まことに懇切丁寧な温泉名である。同じことを三度も言わなくてもいいと思うのだが、命名者がしつこい性格なのであろう。白鷺の群棲で知られる目沢湖^{めざわ}にほど近いところにあるこの温泉は、しばしば、蛇が入りに来るのが珍しい特徴である。猿や熊が入る温泉は他に例もあるが、蛇が入りに来る温泉はそうないであらう。

何気なく湯につかっていると、すぐ横をメートルほどの蛇がゆったりと泳いでいるということもよくある。一度私が行った時などは、湯面をびっしりと蛇がおおっていて、私のためにつめてすき間を作ってもらうのに難儀したほどである。

ただし、蛇といっても毒を持った種類はいないので安心してよい。それに、人でも動物でも、温泉につかっている時は心ものびやかで、決して噛みついたりしないものだ。その証拠に蛇もすっかりのんびりして、長々とのびている。

この露天風呂は混浴なのだが、女性が入っているのを見かけることはほとんどない。やはり蛇が気に入らないのであろうか。

宿は目沢湖のほうから来て手前から、鯨旅館、稲子旅館、見水旅館の三軒があり、内湯は別として、外湯は共同であるからどれに泊っても同じ露天風呂である。三軒とも、はたごはやってくれるが、本来湯治宿スタイルの古びた宿ばかりである。このあたりは名だたる豪雪地帯で、冬は営業を休止している。

交通 目沢湖線目沢湖駅からバス1時間（冬期運休）。国道13号線山鱈毛から20キロ。

泉質 含重曹食塩硫化水素泉プラス蛇の成分。47度。

効能 神経痛、リユーマチ、皮膚病。

宿 3軒。

◆鯨旅館 Cランク。収容20人。料理がまずい。

◆稲子旅館 Cランク。収容15人。料理がまずい。

◆見水旅館 Cランク。収容5人。料理がまずい。

まいごだに
迷子谷温泉（山形県）

福島から普通列車で北上し、手薬根トンネルを抜けるとそこは手薬根駅である。

迷子谷温泉へは、その駅から日に三回、有料の送迎バスが出る。バスに乗って三十分で、駒^{こま}谷^{たに}の谷あい^{たに}にへばりついた、ひなびた温泉に着く。一見したところ、谷あい^{たに}に迷路が描かれていのように見えるはずだ。その迷路は、谷底の露天風呂へ行くための屋根つき階段なのである。迷子谷温泉の名は、露天風呂へ行くための階段通路があまりにも複雑に入り組んでいるため、迷子になる人が続出するところからつけられた。

なにしろ、一番上にある湯^ゆの端^{はた}旅館から露天風呂までは、歩いて二時間かかるというとてもない通路である。宿名に偽りあり、と言うべきであらう。

どうしてそんなことになったのかというと、谷底に大変素晴らしい温泉があるものの、崖が険しくてその辺りに宿を作るだけのスペースがないわけである。そのためやむなく、谷の上のほうの道ぞいで、やっと小さな宿がかるうじて建てられる、というところに、五つの旅館ができた。そして、そこへ泊る客のために、露天風呂へ行くための通路を作ったわけである。

ただし、その五つの旅館は一時期にできたのではなく、順々につけ加えられていったので、通路はそのたびに足され、枝道となって複雑怪奇につながってしまった。それで、まるつきり迷路になってしまったのである。

露天風呂まで行くのはそれでもまだなんとかなる。ともかく下へ下へと下っていけばいいからだ。ところが、自分が泊っている宿へ帰ろうとすると、今度はひたすらに登り階段を上って

いかなければならない。へとへとになった頃、階段が二つに分かれる。さて、どっちから来たんだろうか、と迷う。

右は〇〇館、左は××館とか書いておけばよさそうものだと思うが、そこが、田舎のことゆえ、何ごともゆったりとしている。確かに案内板があることはあるのだが、そこには、こっちさ行くとへげねし、あっちさ行くとまろかわしいげ、などと書いてあって、都会から来た客には何のことだか意味がわからないのだ。そこで、当てずっぽうにどちらかを選んで進む。しばらく行くとまた枝分かれしている。どちらかを選ぶ。

そんなふうにして一時間以上階段を登ったあげく、やっと着いたと思った旅館は、自分が持っている手ぬぐいに刷りこまれた旅館名と違っているのだ。お年寄りなどは、じゃあこの宿に代えたい、などと言っている。しかし、お財布はもとの旅館のほうに置いてあるんでしようと断られて、泣いている人もいる。

私がこの迷子谷温泉を訪ねた時も、風変りな人を見かけた。階段通路のすぐ脇で、飯盒はんごうでご飯を炊き、野うさぎを焼いて料理しているのだ。どうしてこんなところにいるんですときいてみたら、自分の泊っている宿へどうしても帰れず、ここに住みついて十日になるのだと答えた。あの人はどうなってしまったであろうか。

そんなわけで、実際に行ってみるのはちょっと勇気のいる迷子谷温泉だが、お湯は素晴らしい。